

平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520201

研究課題名（和文） ロシアン・チャイナにおけるロシア文学の研究

研究課題名（英文） The Study of Russian Literature in Russian China

研究代表者

ヨコタ村上 孝之 (YOKOTAMURAKAMI TAKAYUKI)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：00200270

研究成果の概要：

当初の計画以上に進展している。すなわち、データベースについては、ほかの研究者の実用に供せるような、試用版が完成した。このデータベースに基づいて、また、亡命文学・ディアスポラ文学理論関係の資料から得られた知見を応用しつつ、読解・分析なども継続して行い、その理論的解釈を深め、成果がいくつかの論文にまとまりつつある。現在までに図書に収録された論文が一本。平成 21 年度中に出版予定のものが二本ある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：比較文学、ロシア文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：ロシア文学 亡命文学 ディアスポラ 植民地 満州 極東ロシア ハルビン ウラジオストク 移民 未来派

1. 研究開始当初の背景

一国文学の枠を越えて、亡命文学、ディアスポラ、(ポスト)植民地、ゲッターなどの文学を研究することが、文学・文化研究の中で重要視されるようになってきている。本研究も、そのような観点に立ち、しかも、先行研究の非常にとぼしいロシアン・チャイナ(ロシア勢力下の満州)の文学を研究しようとしたものである。研究代表者は、すでに、平成 13 年度、日本学術振興会 NIS 諸国派遣プログラムでの、ウラジオストクでの調査、平成 15-16 年度に科学研究費基盤研究(C)(2)「マトヴェーエフ家文学の研究」などで、当該分野

の研究成果を蓄積しつつあった。

2. 研究の目的

- ① ロシアの東清鉄道の沿線、ハルビン、旅順などを含む地域——暫定的にロシアン・チャイナと呼んでおくことにする——は、世紀の変わり目から 1935 年に日ソの合意により東清鉄道が満州国に譲渡・売却されるまで、ほぼロシアの勢力圏にあった。ここには多数のロシア人が居住し、その中には多くの文化人もいて、国際文化都市の様相を呈していた。だが、ロシアン・チャイナといっても日・露・中・満・韓の雑居地帯で、高度のコスモ

ポリタニズムが達成されていたのである。本研究は、このように文化的・社会的・政治的に非常にユニークで興味深い地域であったロシアン・チャイナに目を向け、その地でのロシア文学・文化を検討することによって、ロシア文学史の欠落部分を補い、同時に雑種文化のあり方、多文化社会の成り立ちについて一般的知見を与えることを目的とする。

- ② ロシア文学研究に限らず、一国文学史は周縁の文学的・文化的事象を無視・軽視してきたが、本研究はそれを修正しようとするものである。近年、行われている、米国やヨーロッパの亡命ロシア文学の研究も、このような修正作業であるが、それらの研究が「西洋（比較）文学」研究の枠を出ないのに対し、本研究では、ロシアン・チャイナという特殊な地域に注目することによって、東洋文化をも取り入れた、さらに高度の雑種性について考察できることが特色である。その意味で、ロシアン・チャイナのロシア人文学者の多くが東洋学に造詣が深かったことも、研究資料として大きな意義を持つてくるものと思われる。同地では日本学もさかんに行われていたが、日本文学者、文人——二葉亭四迷、石光真清、大庭柯公ら——も、この地と深い関わりを持っていた。したがって、本研究はロシア文学研究だけではなく、日本文学研究にも寄与しうるのである。また、パリやニューヨークのロシア文学研究が政治的には比較的安定した状況での亡命文学の研究であるのに対し、ロシアン・チャイナは紛争・干渉・粛清など、極度の動乱の中にあった社会であった。そして、極東ロシアとの間に、イデオロギー的対立の構造も持っていた。ロシア勢力圏内にすでに政治的対立があったのである。このような複雑な地でのロシア文学を研究することによって、多文化社会との政治的関わり、文化とイデオロギーのダイナミズムなどがより明らかになるものと期待できる。
- ③ ロシアン・チャイナのロシア文学の研究はロシアでも米国でも日本でもほとんど行われていない。本国ロシアの文学研究者は周縁の文学をほとんど無視してきた。米国人、日本人にとっては、資料へのアクセスが難しいことが障害あるいは無関心の原因になってきた。本研究は、当該テーマの研究として、ほとんど最初のまとまった研究になり、関連分野に対する寄与は大きい。

3. 研究の方法

ロシアン・チャイナのロシア文学作品は、いくつかの雑誌に発表され、また、ハルビンなどの地方都市で出版されていたが、ほとんど散逸している。極東ロシアの公立図書館などに所在の新聞・雑誌に関しては、極東国立歴史公文書館が刊行した、『極東地方の図書

館および公文書館所蔵新聞雑誌目録』があるが、これを参照して、極東地方での資料収集を行う。また、新聞・雑誌・出版物などは、モスクワ、ペテルブルク、ニューヨークなどの図書館、公文書館にも散在しているので、これを閲覧・複写する。

とくにハバロフスク国立公文書館のマトヴェーエフ・コレクションの中の、ヴェネディクト・マルトおよびニコライ・マトヴェーエフ・ボードリィに関する資料を入念に調査する。ハルビンで出されていたロシア語雑誌『ルベージ』は、ロシアン・チャイナにおけるロシア文学の中心的発表母体であったので、とくに慎重に調査する。国内では東京、札幌などに調査・研究旅行にでかけ、東京大学総合図書館、国立国会図書館、北海道大学スラブ研究センター図書館、同文学部図書室などで、日本人による満州紀行などを中心に、資料の閲覧・複写を行う。

ロシア、米国、日本の図書館、公文書館などで収集した資料は、できうる限り、電子化し、研究資産として活用できるようなデータベースにまとめる。そのためのアシスタントを雇う。文献には英語、日本語、ロシア語以外の、研究代表者がかならずしも精通していない言語のものもあるので、これも翻訳者を雇い、日本語化し、その形でデータベース化することに意を用いる。極東ロシアの文化に関してはライデン大学が研究の蓄積を有しており、ドイツ語、オランダ語での研究が刊行されている。これらにはとくに注意を払う。

亡命文学・ディアスポラ文学については、近年、カルチャル・スタディーズやポストコロニアル批評などの分野で、大きな理論的展開がなされているので、関連図書の購入、また外国の図書館などでの閲覧を進める。ガヤトリ・スピヴァーク、ホーミ・バーバ、クワメ・アンソニー・アパイア、ガリン・ティハーノフをはじめとする研究が特に寄与していると思われるので、それらを購入・参照の上、批判的に吸収し、それをもとにテキストの分析、そして、ロシアン・チャイナのロシア文学の歴史的・文化的意義を明らかにする。

4. 研究成果

当初の計画以上に進展している。ハルビンからは離散して残っていない、多くのテキストを、各地（ロシア、米国、ラトビア、アゼルバイジャンなど）で確認することに成功し、複写した。たとえば、ウラジオストック・ハルビン出身の、未来派詩人ヴェネディクト・マルトの著作が、ペテルブルク市ロシア公立図書館に多数、所蔵されていることを発見し、これを閲覧・複写した。ラトビア国リーガ市中央図書館、同科学アカデミー図書館でも、貴重な資料を見つけることができた。

ハバロフスク市地方史博物館では、ヴェネディクト・マルトのアルヒーフで調査を行い、彼の著作の閲覧、息子イヴァンに宛てた書簡などを調査、また、絵画数点を見ることもできた。

ヴェネディクト・マルトの息子、同じく詩人のイヴァン・エラーギンのアルヒーフを、ピッツバーグ大学公文書館にて調査し、関連新聞・雑誌論文、未公刊の著作、AV資料、書簡などを閲覧することができた。

エラーギンの旧知の友人であり、また、米国の亡命ロシア人雑誌『フストレーチャ』の編集者を長らく務めた詩人ヴァレンチーナ・シンケヴィッチの知己をえることができ、書簡を交換、また、実際にインタビューなども行って、エラーギン、さらには、20世紀後半の、米国東海岸における、ロシアン・チャイナ出身のロシア詩人についての新しい情報を多く収集することに成功した。

これらの研究を通じて、本研究課題に関するさまざまな新しい知見が得られた。

たとえば、亡命ロシア人の出身に基づく人種的差異（ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、ユダヤ人など）が、亡命先において意味のある区別となり、サブ・グループを形成したであろうかということが、解決すべき問題として提示されていたが、ロシア語話者による、サブ・グループ化は、亡命先の社会ではほとんど見ることができないということが分かった。これは、『フストレーチャ』ほかの、米国亡命ロシア人の出版界の状況から確認することができた。ヨーロッパや米国で出版された、亡命ロシア人の文学作品のアンソロジーは数種類あり、刊行部数が少ないため、その閲覧は困難であったが、科学研究費に基づく出張の際に、モスクワ、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアなどでかなりの数のものを発見し、閲覧・複写することができた。

ウラジオストクそしてハルビンのロシア文学者たちは詩人が中心であり、その中の顕著な者であるアルセーニー・ネスメーロフ、ゲオルギー・イヴァーノフ、ヴァレーリー・ペレレンなど注目になるので、彼らに関する資料、また、その作品のテキストなどを渉猟し、多くのものを閲覧、複写することができた。雑誌『トヴォールチェストヴォ』に代表されるように、ロシアン・チャイナおよび極東ロシアの詩人は、ほとんどすべて未来派の傾向を強く有している。その作品の理論的分析を通じて、地理的辺境性および政治的両義性がアヴァンギャルドの志向に直接むすびつくものであることを検証することに成功した。モスクワからシベリア、極東を経由して、日本にわたり、最終的には米国に移住した、未来派の詩人デーヴィッド・ブリュリュークの作品、エッセイ、画集などを、

日本の美術館、米国の大学の図書館などでかなりの数を発見した。この未来派の詩人が、日本の文学者、美術関係者、また、大衆文化（マンガなど）の担い手に大きな影響を与えていることがわかり（マンガについては、未来派の画家による、運動の表現の仕方が日本のマンガ家に示唆を与えていることを検証した。この問題については別に論文を準備中である）、広い意味でのロシアン・チャイナのロシア文学の影響がまたひとつ明らかになった。今回の科学研究費の課題とはややそれるが（「今後の研究の展望」により関係するが）、デーヴィッド・ブリュリュークが、米国においてユダヤ人のスラブ系文学者と親しく交流していたことも分かり（たとえば、マイケル・ゴールド）、さらなる研究の領域が提示された。

また、ロシアン・チャイナにおいて、さまざまな文化的交流が達成されており、ハルビンのような国際文化都市では高度の文化的雑種化が起こっていることが確認された。もっとも顕著な現象としては、ロシアン・チャイナを通しての、ロシア文化への日本への事例がいくつか確認できた。ハルビンから日本へのロシア人移民による文化（バレエ、音楽、詩、演劇など）への影響はすでに報告されているところであるが、今までに知られていなかったつながりもいくつか発見された。たとえば、亡命歌手、詩人、パントマイム演者であったアレクサンドル・ヴェルチンスキーがハルビンにある期間滞在しており、ほぼ同じころにハルビンにいた日本人作家群司次郎正の作品の中にしばしば引用されている。群司の作品は、白系ロシア人のダンサー、歌手、娼婦との交際を描いたもので、日本のモダニズム文学、および大衆文学に、植民地的「異界」が、文化的な媒介を契機として、作用を及ぼしていたことを示しているのである。なお、角川学芸出版より『金髪女性の表象の研究——文学・映画・コミックにおいて』という図書を刊行準備中であるが、その中には大正から昭和初期にかけて、日本の文化で大きな役割を果たしたダンサーたち（ストリップ・ティーズも含めて）の活動を取り上げる予定であるが、それらの中にはハルビンよりの亡命ロシア人がかなりの数、存在しており、ロシアン・チャイナのロシア文化が、日本の大衆文化に与えた影響を明らかにしていく予定である。

データベースについては、ほかの研究者の実用に供せるような、試用版が完成した。このデータベースに基づいて、また、亡命文学・ディアスポラ文学理論関係の資料から得られた知見を応用しつつ、読解・分析なども継続して行い、その理論的解釈を深め、成果がすでに発表したもののほかに、いくつかの論文にまとめつつある。ハルビンという国

際都市において、ロシア文学者ではない日本文学者と、文化的交流が深まっていた事実などが新たに明らかになった。理論的レベルでは、ハルビンの辺境性と、アヴァンギャルドおよび韻文という形式とのつながりを検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

① Yokota-Murakami, Takayuki.

"Vladivostok-Berlin-N'iu-Iork: O zhizni i tvorchestve poeta Ivana Elagina (Vladivostok-Berlin-New York: On the Life and Works of the Poet Ivan Elagin)." *Proceedings of XXIII Rossiisko-iaponskogo simposiuma istorikov i ekonomikov DVO RAN i raiona Kansai Iaponiia* (Proceedings of the XXI Russian-Japanese Symposium of the Historians and Economists of the Far East Russian Academy of Sciences and the Kansai Area of Japan). Vladivostok. Dal'nauk. 2008. Pp. 116-124. 査読無し。

② Yokota-Murakami, Takayuki. (Co-authored with Linda Galvane) "Spal'vin v Rige: Neizvestnye stranitsy zhizni (issledovatel'skie zametki) [Spalvin in Riga: The Unknown Pages of His Life]." *Pervyi professional'nyi iaponoved Rossii: opyt latvisko-rosiisko-iaponskogo issledovaniia zhizni I deiatel'nosti E. G. Spal'vina* (The First Professional Japanologist of Russia: An Attempt at the Latvian-Russian-Japanese Research on the Life and Acts of E. G. Spalvin). Vladivostok: Izdatel'stvo Dal'nevostochnogo gosudarstvennogo universiteta. 2007. Pp. 69-73. 査読無し。

③ Yokota-Murakami, Takayuki. "Zhizn' i tvorchestvo sem'i Matveevykh (Life and Work of the Matveevs)." *Materialy XXI rossiisko-iaponskogo simposiuma istorikov i ekonomistov DVO RAN i raiona Kaisai Iponiia* (Proceedings of the XXI Russian-Japanese Symposium of the Historians and Economists of the Far East Russian Academy of Sciences and the Kansai Area of Japan). Vladivostok. Dal'nauka. 2007. Pp. 99-110. 査読無し。

[学会発表] (計3件)

①平成21年2月13日。甲南大学人間科学研究科にて。共同研究「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」研究会。発表題目「父の血は贖われたか——亡命ロシア詩人エラーギンにおける、トラウマの文学的昇華について。」

②平成20年11月21日。アゼルバイジャン国バクー市バクー・スラブ大学にて開催された国際会議「文化と文学におけるステレ

オタイプ」にて。発表題目「The Future in the Margin: The National and the International in the Russian Émigré Poetry from the Far East.」

③平成20年6月6日。リュブリャナ市スロバニア科学アカデミーにて。国際比較文学会文学理論分科会。発表題目「The Future in the Margin: The National and the International in the Russian Émigré Poetry from the Far East.」

[図書] (計1件)

①2008年。ウラジオストク。ダリナウカ社。第23回日露極東学術シンポジウム・プロシードィングス。執筆論文「ウラジオストク—ベルリン—ニューヨーク——詩人イヴァン・エラーギンの生涯と作品について」。99-110 ページ、および 214-227 ページ。全 227 ページ。

[その他]

ホームページ等

<http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~murakami>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ヨコタ村上 孝之 (YOKOTAMURAKAMI, TAKAYUKI)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：00200270

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし